

京都の五元老

大沢商会の祖であるとともに電気事業界の先覚者である大沢善助は、一九二九(昭和四)年に出された回顧録『回顧七十五年』の中で、次のように述べている。

私が二十三四歳の頃、神様が私を選び出し給ふて信者となし、神様の御栄をあらはす道具にお使ひ下さったものと信ずる。それは京都のクリスチャンの内でも一人の成功者を造って、神様の御栄をあらはさせ給ふ事は、伝道にも必要であつたのであ



同志社人物誌 (63)

大 沢 善 助

高 久 嶺之介

る。それ故神様は私を選んで其の道具になさつたのであるから、京都の実業界に於て、元老と称せられ、其の手腕に於ても、財産に於ても相当の信用を受け又尊敬をも払はれたと云ふ事も皆、神様のなさる事であつて、私には何の手腕も何の能力もなく、只神様の御心の儘にお使になつたのである。私は只、神様の命じ給ふ儘に忠実に働くのが仕事であつた。然し段々と地位が上るに連れ、高慢にならぬ為め時に重荷を負はさせられた。即ち二度までも監獄に入つたり、三度も大病に罹つたりした事は神

様が私にお与へになつた試練に外ならないと思ふ。

大沢は新島襄から洗礼を受けた敬虔なクリスチャンであつた。と同時に、大沢は、京都の政財界に大きな影響力を持った元老と言われた人々の一人であつた。明治中期から大正期にかけて、京都の元老と言われた人々は、大沢によれば、田中源太郎と内貴甚三郎と浜岡光哲それに大沢の四人であり、『田中源太郎翁伝』の著者によれば、この四人と雨森菊太郎を加えた五人である。この五人の人々は、後述することくきわめて密接な関係をもつて活動するが、大沢の場合、この五人の中では、立志伝的側面の強さとキリスト教に基づく宗教上の信仰の強さにおいて際立った特徴を見せている。

しかし大沢善助の生きてきた道、その活動の全容はいくら素描とは言え限られた紙数の中では書ききれない。ここでは前半生を中心に、そして新島、キリスト教、同志社との関係を中心に素描することになる。

変転する職業

大沢は、一八五四（安政元）年二月九日、上京区富小路通丸太町下ル榊屋町（現在の京都裁判所のところ）に、大垣屋音松の次男として生れた。幼名松之助。母は梅といひ大沢五歳の時に死去する。父の音松は、人足請負業で俠客として知られた大垣屋清八の配下であった。大垣屋は、会津藩、高田藩、彦根藩などの御用達を勤め、きわめて多忙を極めた。一八六七（慶応三）年、大沢一四歳の時、大垣屋請負の彦根藩の六角通大宮西入ル下宿所



右からみつ、善助、子息徳太郎、徳太郎妻幸恵。
1921（大正10）年。

なる某寺で賄方帳場役を勤めている。しかし、翌年一月鳥羽伏見の戦いに始まる戊辰戦争が勃発し、大垣屋は会津藩用達であったため主人清八は逃走し、家業は壊滅する。そのため大沢は、大垣屋に勤めることを辞めて、堀川出水角米穀商松村屋重兵衛に丁稚奉公に入った。この頃は藤助と呼ばれた。そしてそれから二年後の一八七〇（明治三）年、本家大垣屋に相続人がなかったため、松村屋より暇を取り、大垣屋清八の養子になっている。この時清八と改名している。なお、維新により苗字を用いることになったので、大沢清八

となった。そしてこの年、一二月五日石橋定助の娘であり、大沢家の養女であったみつと結婚している。しかし、翌年八月には大沢家を脱走する。維新以来大沢家には定まった職業がなく、知人と共同で行なった白米小売の商売が失敗し、そのことにより養父との関係が悪化したためである。この結果、竹屋町寺町西入ルに借宅し、白米商を開き独立して営業を開始する。しかし、この商売も米相場に手を出したことに

店に至り、転居して米相場師を本業とするようになる。ところがこれも失敗し、舅定助の家に同居して生魚商を始めた。この頃名を善助と改めている。そして、魚の行商のかたわら、山本寛馬の家で草鞋はぎの盛縁側や台所で山本が京都の名家の子弟に講義するのを傾聴したらしい。この時の山本の門弟が、後に交遊を深める田中源太郎、浜岡光哲、雨森菊太郎、中村栄助、垂水新太郎などである。

一八七五（明治八）年一月、善助は、養母ぬいの尽力などにより再び大沢家に復帰し相続人になる。しかし、この復帰は別居して営業をなすという条件であったため、寺町丸太町下ル下御霊前町に借宅し、大沢家より資金援助を受けて再び白米小売商を開始した。同年、寺町丸太町上ルに同志社英学校が開設される。この時、近所であったため英学校の米は一切大沢から買い、大沢自身米を担いで英学校に運んだ。このことが大沢の大転機になる。大沢と新島との出会い、そして大沢とキリスト教との出会いである。

キリスト教への入信と同志社への関与

大沢は、白米商として同志社英学校に出入りする中で、新島のキリスト教の説教を聞き、信仰の道に入ることになる。しかも時をおいて妻もそして養父母も信者になる。当時、商売人、しかも一家揃って信者となるという事はきわめて珍しいことであった。養父清八が信仰の道に入るにあたっては逸



丹精の草顔に楽しむ大沢夫妻

話がある。清八は毎年金比羅参詣を欠かさないほど熱心な金比羅大権現の信者であった。

清八をキリスト教に導くことは至難のことに思われた。当時信者の集まりは新島の家で開かれたが、善助はその席に同道を勧め、漸く出席させた。養父母の同席は新島およびデヴィス夫妻を大変喜ばせ、当時目が不自由になっていた清八にデヴィス夫人が手をとって椅子に座らせるなど、非常に親切なものでなしをした。このことは清八を感動させ、新島の説教を喜んで聞くようになり、ついに新島から養父母共に洗礼を受けるに至ったという。

大沢が、第二教会で新島より洗礼を受けるのが一八七七（明治一〇）年三月である。その後一八七九年に第三教会（現在の平安教会）の教会維持の必要性から第三教会に転じている。妻みつも一八八二（明治一五）年第一教会でやはり新島より洗礼を受けている。

洗礼を受ける前後の大沢は、米商からさらに職業を転じて、古道具商を主な商いにするようになる。一八八〇（明治一三）年には、古道具商のほか、貿易品押絵細工の製造を始め、この事業は成功しきわめて繁忙をきわめた。しかも、翌年には上京区第二五組連合町

会議員、ついで上京区区会議員に当選する。

一八八四（明治一七）年には京都市部選出の府会議員に当選する。翌年北垣国道京都市知事の政治生命をかけた大事業琵琶湖疏水工事の開始にあたり、工事の監督および当局の諮問に応じる事を目的に区会議員中より組織された常議員の一員になる。この年には京都商工会議所の議員にもなる。このように、大沢は、洗礼を受けて以降、事業も順調に進み、いよいよ京都の名士としてのしあがっていく。

大沢は同志社の経営にも参画するようになる。一八八五（明治一八）年、同志社女学校には大変な問題が持ち上がった。外国人宣教師と日本人教師の対立による廃校騒ぎである。大沢は、幹事中島末治らとともに再開と経営維持に奮闘した。大沢の言を聞こう。

この頃の同志社女学校の生徒は僅に五六名であって、其の内、宣教師の補助を受けて生活をして居る生徒もあって、随分其維持は困難であったのみならず、第一に同志社女学校の経営を引き受けて行く責任者の無い事が最も大なる欠陥であった。それ故継続をしようと思へば、誰か責任者を作らなくてはならなかった。教育上の責任を

負ふ人は有ったが経済上の責任を負ふて同志社女学校を維持して行く人はなかつた。

そこで私に是非責任を負ふてやつて呉れとの事であつた、この場合やむを得ない事として明治十九年幹事に就職してそれ以来経営の任に當つた。この時月給二十五円を受けて日勤した。幸ひその後生徒も次第に増加して百名以上になつて来たから、階下を教室に階上を講堂とする一棟を建築し又予備科の生徒を入れるために二階建を一棟増築した。ここに新入生を入れ一兩年で経済がもてる様になつたから、こゝで中島末治氏を校長に依頼して万事の責任を持たせ私は元の一商人になつた、時に三十四歳であつた。

大沢が幹事を辞めるのは一八九〇（明治三三）年九月であるが、大沢の奮闘はきわめて印象的であつたらしい。当時の同志社女学校の生徒であつた深田照と田中竹は後年次のごとく回想している。

同志社は其後、大沢善次郎氏（マヤ）が幹事に就職されてから一大改革に逢ひ、舎生一同は其良政を深く喜びました。同氏は荒れ果てたる藪地を利用して沢山の鶏を飼育し、其

玉子を生徒の食事の料とせられた事等は、誠に感謝に堪へ無い事でありました。

（深田）

大沢善助氏は京都の立派な紳士でありながら、同志社の為に非常に尽力せられたので、氏の行為に依て良感化を受けた事が沢山あります。其美譚の一例としては、金曜日の祈禱会に全生徒が教会堂に行き帰りの送り迎へを悦こんでせられ、又、當時淀川の運河工事中でありました、出来上がれば勿論あなた方を伴てそこを通して見ますが、其工事を見る事も亦一つの学問であるからと言はれ、自身案内せられて私共に工事の模様を見せて下さいました。誠に氏の尊い精神に感謝せずには居られません。

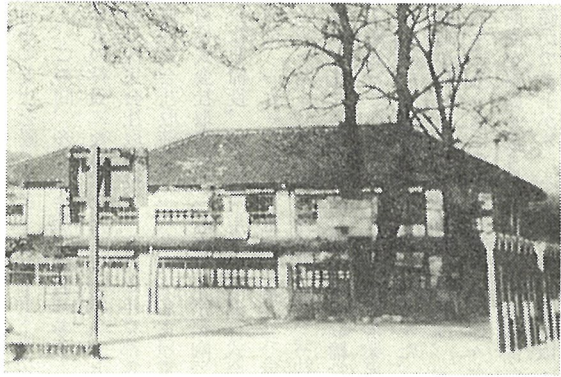
（田中）

大沢は、紺の前垂れ掛けで活動し、朝会における講話も行なつたが、それはきわめて現実即した内容が多かつたようである。話し上手でもあつたらしい。比喻が適切で具体的であつた。多くの人が指摘しているように、「理屈家ではなく実務家」であり、胆力に富み、果斷決行の人であつた。しかもきわめて勤勉であつた。様々な職業を遍歴し、様々な

苦難をみずからの創意によつて乗り切つてきた大沢は、同志社女学校も経営的に見事に立ち直らすのである。

一八八八（明治二一）年、大沢は新島の依頼を受けて同志社社員となつた。一八九九（明治三三）年同志社社員会が理事会と改称された時理事にも就任し、一九〇七（明治四〇）年には息子徳太郎が大沢に代わつて理事に就任した。一九二五（大正一四）年、同志社に評議員制が設けられた時、大沢は評議員に選出されている。また、一九二五（大正一四）年、同志社女学校が生徒数の増加と共に寄宿舎に不足を来したため、六〇人を収容し得る寄宿舎一棟（大沢寮）を同校内に建築し寄附している。このように、大沢は、同志社を主に経営の面で支え続けた。新島八重が、「同志社の恩人」「同志社なり同志社女学校が今日の大をなしたのは全く大沢さんが陰に陽に努力されましたによるもの」というのも、決してみびいきな表現とは言えないであろう。

大沢は教会の発展のためにも生涯尽力し続けた。大沢は、日本組合教会伝道会社の事務所が一八九七年京都より大阪に移るまで、一



大 沢 寮

○年間会計を勤めた。また、大沢は自己が所属した平安教会の役員を一貫して続けた。一八九〇年前後は日曜学校長を、そのほか評議員、財産管理者、執事を勤め、特に執事は、大正初期から死去するまで勤めた。一九一八年から敗戦時まで平安教会牧師を勤めた山口金作によれば、大沢は金曜日の祈禱会と日曜

日の朝会は毎週ほとんど欠かすことがなかったという。平安教会にとって大沢はなくてはならない存在であった。

電気事業界の先覚者

大沢が名実共に京都の大実業家になっていく契機は、一八九二（明治二五）年一月田中源太郎の勧説により京都電燈会社（一八八七年創立）の社長に就任して以降である。

それ以前、大沢は、一八九〇（明治二三）年に京都時計製造会社を設立し社長となり、翌年琵琶湖疏水によって生じた電力を使用し時計製造を始めた。しかし、この年、土方請負業者に資金貸与し、折からの濃尾大地震の混乱のため全く余財がなくなるほどの損害を受ける。この時田中が頭取をつとめる京都商工銀行から多額の資金融通を受ける。田中はまた自らが創立委員長を勤め当時成績が芳しくなかった京都電燈会社の取締役に大沢を推薦し、この結果大沢は取締役、ついで社長になった。大沢は入社を目的を「第一の目的は北垣府知事が一生懸命になって完成された疏水工事の発展を計る為であった」としている

が、水力電気を使用し、電気方式を改めるなど経営の才を全面的に発揮し、京都電燈会社の事業を拡大し大会社に仕立てていくのである。

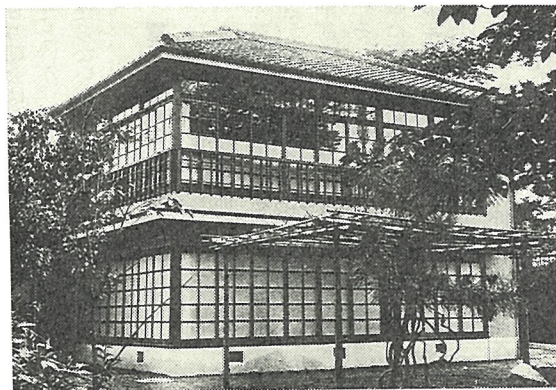
結局のところ大沢の人生にとって影響を受けた人物を挙げれば、多数の人物の中で特に新島、田中、北垣であろう。田中と大沢は、一八八九（明治二二）年二月、明治十年代自由民権運動の再興を意図する大同団結運動に対抗して、実利主義的立場から京都府下人心の政治的組織化を図ることを目的に組織された京都公民会の中心メンバーであった。他の中心メンバーに浜岡光哲、雨森菊太郎、内貴甚三郎らがいた。公民会は京都府政界では、明確に当時の京都府知事北垣国道の与党であった。この公民会の中心メンバーの人々、特に田中、浜岡、内貴は、明治十年代後半から二十年代初頭の企業勃興時に田中が頭取を勤めた京都商工銀行（一八八六年創立）を金融の核として、北垣京都府知事から陰に陽に支援を受け、京都織物会社、京都電燈会社、京都倉庫会社、関西貿易会社などを創設させ、その経営に当たる。そして前述した如く、大沢は、京都電燈会社が創立されてから数年を

経て経営に当たる。大沢は上記の人脈の中で互いに支援し、支援される関係にあった。

京都電燈会社社長就任後、大沢の活躍は顕著である。果敢な実行力、勤勉に裏付けられた卓抜な経営の才は電力需要の年を追っての拡大という状況にも支えられて遺憾なく発揮される。京都電燈会社では、一九二七（昭和二）年までの三七年間社長をつとめ、大津や福井に支社を置くなどその経営を成功に導く。この間、多くの会社の創設に参加し、またその役員になる。たとえば一八九三年神戸赤心株式会社取締役、一八九四年京都電気鉄道株式会社取締役、一八九五年名古屋電気鉄道株式会社取締役、一八九九年京都陶器株式会社取締役、一九〇一年釜山電燈株式会社取締役、一九一〇年京都電気鉄道株式会社社長、一九一九年日本水力電気株式会社取締役、一九二〇年大同電力株式会社取締役などである。このように、大沢は電気事業界を中心に確たる位置を築いていた。また、時計製造から始まった大沢の個人経営は、一八九六年三条小橋に新店舗を開設し、様々な輸入商品を幅広く扱うようになり、大沢商会の基礎がで上がる。そして、東京・大阪・神

戸・香港・シドニーに支店を持つに至る。これらは後に長男徳太郎に受け継がれる。

公職としては、市議員が一八八九（明治二二）年から三年間、府議員が一八八四（明治一七）年から一九〇三（明治三六）年まで一九年間、その間市部会議長、府会議長も勤めた。また、京都商業会議所の副会頭も勤



現在大学院教室（旧厚生館）

めている。そのほか、大正期には京都感化保護院理事長をつとめるなど免囚保護事業にも尽力する。大沢にとって生涯二度の「奇禍事件」、すなわち一九二一（明治四四）年の当時社長を勤めていた京都電気鉄道株式会社の通行税脱税事件、一九一八（大正七）年の市長選挙に絡んで多くの市議員と共に連座した瀆職事件により収監されるという事態も起るが、それらが直接に私利を目的にしたものではなくたこともあり、大沢の名声を大きく落す事にはならなかった。一九三四（昭和九）年一〇月一〇日没。クラーク館北東の旧厚生館は、左京区田中関田町にあった大沢の別邸を、一九四一（昭和一六）年当時理事であった子息徳太郎が寄付したものである。

大沢については、自身の回顧録として『回顧七十五年』があり、同じく一九二九年に大沢善助翁功績記念会から『大沢善助翁』という大部な伝記が非売品として発行されている。

（大学人文科学研究所教授）